

これぞ「昨日の敵は今日の友」といったことが、つくづく実感されました。

港にはリバイ船が横付けされていて、我らを迎えてくれました。さあ乗船だと、次々に胸を膨らませて棧橋を渡って乗り込むこの気持は、生れて初めての喜びです。

空は晴れて、我らの進む東の空も日本晴だ。船は静かに動き出し、大隊長が階級章をはずせとの命令を出し、一人の兵隊として階級章をみな海の中に捨てました。初めてすべてが日本国民の一人に戻って「だれそれさん」と呼び合い、隣の人も前の人も、どこを見てもみな日本人だ、軍隊はなくなった、だれの顔も明るく、故郷への思いでいっぱいです。

船の中では、広島、長崎の原爆の話も聞かされ、自分が帰る家はあるだろうか、どうしようかなど語り合いつつ、船は九州五島列島を過ぎ、博多港へと波を立てて全速力で進んで行きました。

おわりに

富士は天高くそびえたち、昭和天皇崩御、昭和も去り、年号も新たに平成と名付けられました。

年老いた妻、子とともに六十八歳、終戦後、夢と去った四十幾年が過ぎた今日、亡き友を弔って思い出深い回顧を今、ここに綴る。

激動の時代・追憶あれこれ

山口県 市川 勇

昭和十二年六月二十九日陸軍士官学校卒業直後、支那事変勃発、二十一歳、早くも応急動員部隊野砲第五聯隊小隊長として八月三日宇品港出発、見習士官のまま戦火の第一線である北支戦線へ駆けつけた。

まず秦の始皇帝の夢を秘め、長年月の歴史とともに風化してはいるが、近代戦にもけっこう防側側にとっては威力を発揮した万里の長城戦の突破攻撃に参加して、現在では考えることすらできない大きな輓馬六頭立ての軍馬とともに、一〇センチ榴弾砲の威力を遺憾なく発揮しつつ、戦史上に輝く激戦地忻口鎮から山西省大原の攻略戦にと進撃を続けた。

戦火の苦勞もさることながら、炎熱の北支山地、狭くて急坂の長城線、凸凹・石ころだらけの山道を重い大砲を引いての行軍の苦勞は、全く筆舌に尽くせないものがあった。日陰のない谷間で人間はなんとかできるが、ものいわぬ軍馬、それも鉄輪の重い重い大砲を轆かねばならぬ任務の軍馬のいじらしい姿は、ほんとに涙とともに感謝しながら励ましたものである。流汗も尽きて、白い塩で身体中一面に被われて水を欲しがっている軍馬とともに、喘ぎながらようやくのことで水のあるところまで辿り着いて水を与えた時、図体が大きいとはいいながら、水のうで三杯も飲んだのには、全く思わず肩をたたいて「有難う」と言ったものである。

山西省の平定が終わっても、戦局は次々に進撃を加える局面に進展して、ついには十三年三月から、徐州会戦の前哨戦に参加、時によっては約四〇倍の敵と対戦、転進に転進（日本軍は、引く時も転進といった）を重ねた。ある時、騎馬で選抜された下士官、兵を約一〇人率いて、隣接師団との連絡将校斥候として周囲敵の中を日露戦争当時の有名な「敵中横断三百里」にはほど遠いもの

ではあっても、不完備な地図を頼りに、地平線の果てまでも続く麦畑の中を迷いに迷って、部落に近付けば撃たれて逃げるしか手のない行進を続けた。ようやく友軍との連絡を終わって無事帰着した時は、疲れ果てながら部下や軍馬への感謝とともに幸運に感謝したものである。

戦火の思い出より、こんな変わった物語も面白いだろうか。徐州会戦中、中国軍小銃弾によって左上膊部に貫通銃創を受けて約一か月、後退、入院、治療、退院して、またも第一線に追及した。徐州会戦が終わったと思ったら、戦火は南支に飛び火して広東攻略戦、亜熱帯地域の作戦では人間より先に馬がまいってしまっ、軍馬の対策には戦火以上に苦勞したものである。広東作戦が終わってまたも北支へ、今度は山東省の掃討作戦・駐留任務について。

討匪作戦は警備隊参謀として、地方対策も含めて変わった体験もしたものであるが、後年、憲兵に転科しての活躍に役立ったようだ。

次は、対ソ作戦でノモンハンの急援で北滿に向かい転進したが、到着と同時に停戦。悪運はますます強いとこ

るだろう。参加していたら・・・。とても・・・。

次は、またも南支、広西省南寧作戦。今度は中国軍の精兵と彼らが豪語していた白崇禧軍との対戦。野砲隊のある中隊は、苦戦の末、支那戦線中唯一と見られる大砲・弾薬車等を敵に奪われるという大変な激戦に参加したものである。中国軍は、戦利品の大砲を昆明から重慶にまで送って「戦勝」を宣伝したということである。

次に始まったのが、昭和十五年九月の今のベトナム、当時の仏領印度支那（いわゆる仏印）への「北部仏印進駐作戦」参加。日本軍が支那戦線でいくら死闘を続けても、援蒋ルートによる軍需物資の輸送援助で、中国軍の死命を制することのできない歯痒さに憤激の極にあった日本中の期待を担っての進駐であった。しかし国際問題の複雑さに翻ろうされて、国境まで行ったり戻ったりを繰り返して、いよいよ本物の敵・先進国と見られたフランス軍との対決に勇躍奔馬のごとく国境を越えた。その時の鎮南関からドンダンの敵望楼に対し、記念すべき砲弾（一〇榴）第一発を放って、我が軍の夜間進撃に氣勢を添え、フランス軍制圧を支援したのは、私が中隊長とし

て号令した第一〇中隊の大砲であった。

しかし複雑な国際問題の中で強行した作戦では、ついに時の司令官、師団長、歩兵連隊長、大隊長までクビになってしまった。その際、師団長中村明人中将の置き土産として、私の中隊に残していった「賞詞」が、しかも当時の本物が師団長の直筆サイン入りのそのまま、幸運にも今の私の手元に保存されているのも、全く今昔の感以上のものである。後年、昭和六十三年三月号「偕行」誌上で当時の記録として発表されているのを見て、懐かしさ以上の感懐であった。

次は、一時、砲工学校での勉学期間、久し振りに内地の空気を吸ったが、卒業と同時にまたも渡支、上海、寧波付近の警備と、第二次世界大戦に備えての機械化部隊への改編と訓練であった。今度の敵はいよいよ本物イギリス軍、マレー作戦・シンガポール攻略である。仏印進駐当時以上の戦意に燃えての猛訓練、「今度こそやるぞ」の意気は高い。

歴史に残る昭和十六年十二月八日午前三時上陸発進、太平洋の荒波の中を、タイ国シンゴラに上陸、大砲も無

事上陸できたが、早朝漸く上陸を終わったところへ同盟通信のカメラマンが通り合わせて、大砲を台車の上に、祭の山車よろしく積んで、それを砂浜の上で人力で押すやらロープで引くやらの珍しい場面をフィルムに収めたものが、後日、マレー戦記のニュース映画に出た。その後、戦記映画にも選出されて、私が中隊長として指揮する場面は、我ながら懐かしいものだった。

十二月十日には国境を突破し、敵が堅塁と誇っていたジットラインもわずか二日の激戦で突破して、文字通り破竹の勢いで南下を続けた。我々の心の中には、力によって世界を征服してきた白人支配の傲慢さへの必殺の反発心の発動に満ちていたものだった。

ところがである。不思議にも徐州作戦で左上臍部に貫通銃創を受けた時に起こったと同様な胸応えがまたも起こり始めたのだった。動物に与えられた「死」に類した危機を予知する「靈感」というものだろうか。どうもなんだかおかしいなと二、三日前から思いながらも、昭和十七年正月元旦、カンパルの戦場に突入したのだった。

砲兵の射撃を指揮するには、観測所の位置が最も大事である。そこで私は歴戦の経験上、周囲がゴム林だったので、見通しを良くするために、歩兵よりさらに前方の山の敵側斜面に座って、電話線を張り、射撃を観測しながら撃ちに撃った。砲兵としては禁物とされている最後の一発まで撃ち尽くして、相当の効果があつたと満足感の中で、後方斜面に下がって「弾薬の補給を受けよう」と思った。その瞬間、敵もさるもの、私たちの観測所が敵方斜面に出ている無鉄砲、無謀さをついたものか、私のすぐ右前方一呎ぐらいの所に敵砲弾が落下、爆発したのである。

アツという間より早く、私の右大腿、右下腿、左大腿、左下腿、右肩胛部(盲貫・現在まで破片二個入ったまま)と腹部擦過傷の重傷を負って、動脈切断によって血が吹き出してしまった。近くにいた部下たちが、ただちに適切な処置をとってくれて、後方の野戦病院に入ったが、激戦のため負傷者が多くて、止血の限度時間がとうに過ぎて、ようやく夜中になってローソクの灯を頼りに手術治療を受けることができたが、全くの危機一髪だった。

翌日、軍医は右脚を切断しなければ命の保証ができないとの判断だったが、連隊長からの電話で「市川中隊長の脚を切らずに置いてくれ」との懇請で、軍医も「できるだけやってみましょう」とのこと、私の脚の切断が助かり、今にいたっても役にたっている運命の別れ道も、不思議以上の現実である。

徐州の時の左上膊部小銃貫通銃創と、この夜の砲弾破片創を合わせれば、私の首から下は念入りにブチ抜かれたもので、被弾七個、傷痕一〇個となっており、大きいのは今でも約一〇センチ四方ある。まさに近代の「切られる与三郎」であろう。

それ以後は、残念ながら前線を退き、入院を続けて約一か年半後、昭和十八年七月から原隊復帰できた。

傷痍軍人のその後は、十二月から憲兵学校将校学生として主として法律学を修得して、十九年八月末から憲兵分隊長に就任し、部下の適切な補佐のお陰で、翌年三月までの約半年間に、全国にも例の稀な憲兵司令官賞状を二回受けたものである。思いもかけず抜群の成績ということにあいなくて、自分自身も、部下も、驚いたことで

ある。

それがためでもないが、二十年三月、編成改制によって今度は、県の憲兵隊長に就任、二十九歳の八月、終戦を迎えるに至った。

運不運は紙一重

京都府 秋田守之

私は昭和十九年（一九四四年）六月二十二日、臨時召集令状により、中部第三七部隊（京都市伏見区深草、歩兵第九聯隊）に召集されました。当時私は舞鶴海軍軍需部第三課の雇員で、海軍航空燃料の供給担当現場責任者でありました関係上、陸軍部隊への召集猶予者となっております。しかし戦局は日増しにきびしく前線から帰還してくる海軍部隊員の話によると、大本営の発表はほとんど正反対である旨、聞かされていた矢先だけに、海軍の召集猶予手続きなど、なんの効果もなくなった現状に直面して、戦局の厳しさを思い知らされたことでした。